

ザラマンダー

火 竜 と 翔 け た ア ク メ の 空



濠門長恭

目次

埋葬	： November 2014	- 3 -
配属	： April 1944	- 6 -
性裁	： Mai 1944	- 25 -
開眼	： Juli 1944		
昇進	： August 1944		
勲章	： Oktober 1944		
誤射	： November 1944		
酒淫	： November 1944		
慟哭	： Dezember 1944		
復活	： Januar 1945		
降伏	： Mai 1945		
後書き			

煩雑さを避けるために、本文中では英語のカタカナ表記（ジェットエンジン、スロットルなど）を主として、ドイツ語は一部を除き、括弧書きで原文表記するにとどめます（Bund Deutscher Mädel など）。

埋葬：November 2014

それまではヒステリー症の治療器具として医療分野で細々と使われていた高価な棒状振動器具に機能上の改善を施してデザイン性も向上させたバイブレーターを、娯楽に供せる価格で普及させ、爾後もピストン機能や回転機能を付与し、IC制御、AIによる個別快感適合プログラムなど、常に技術革新を図り続け、『アダルトグッズ界の女帝』『バイブレーターの女神』として性玩具の世界に君臨してきたアンナ・シュライバーの死は業界関係者に報されることもなく、その葬儀は、生涯独身を貫いた彼女の数少ない遠戚ではなく、彼女にゆかりのあった十人の女たちの手で執り行なわれた。

旧ルフトヴァッフェの飛行服に身を包み、胸に古ぼけたマイセン人形を抱いて棺に横たわるアンナのまわりに花が敷き詰められていく。赤い薔薇、白い百合、黄色の菊、そして青色の矢車草。

惜別の想いを胸にゆっくりと花を手向ける十人の女たちは、年齢を除けば、きわめて似通った印象を受ける。華奢な体型で童顔。いちように金髪だった。そして彼女たちは、ベッドの中でアンナからしばしば『クララ』と呼ばれていたのだった。

女たちは、アンナが初めて『肉体的な同性の友情』を交わしたクララに嫉妬することはなかった。ひとつには、アンナの彼女への想いを理解していたから。そしてひとつには、自分が彼女に似ているがゆえに、多大な金銭的援助を受けていたから。

四種の花に埋め尽くされた棺の蓋が閉じられて。教会から、すぐ裏手の墓地へと運ばれてゆく。棺を担ぐのは近在の住人に委ねて、十人の女たちは二人ずつ並んで若い順に、後ろに着いて歩く。最晩年を共に暮らしていた少女は嗚咽を漏らし、五年前にアンナと別れた娘は目に涙を浮かべているが。それ以前の愛人たちにとっては、すでにアンナは優しく懐かしく遠い思い出となっていた。

墓地に着いた棺は、掘られてあった墓穴に安置され土で覆われて、来たるべき復活の日まで、しばしの眠りに就いたのだった。

墓碑銘には、こう記されている。

アンナ・シュライバー

1925-2017

戦友クララの形見と共に、ここに眠る。
彼女はザラマンダーの復活に生涯を奉げた。

最終階級：空軍大尉

柏葉付騎士鉄十字章

撃墜数：四発爆撃機 7 3 (共同)、戦闘機 1 0

配属：April 1944

ハンブルク南東の草原に広がる、真新しいが急造の空軍基地。戦闘機パイロット百二十人と整備兵六百人。主計や営繕にたずさわる三百人と、二十人ほどの幕僚団。総員一千人ほどの基地に、今日ばかりはそれに倍する人が集まっていた。

百人を超える新聞記者と、親衛隊の一コ大隊。そして、格納庫前の広場にしつらえられた麗々しい壇上には、胸に満艦飾の勲章を吊るした国家の最高指導者。壇の後ろには、基地の将校連も居流れている。

正門の前に四台の兵員輸送トラックが停まって、乗ってきた兵士——ではなく、士官を吐き出した。全員が少尉の階級章を付けている。百名の少尉たちは、二十五人ずつの隊列を組んで正門をくぐり、足並みをそろえて壇に近づき、四列横隊に展開した。

列の中央からひとりが歩み出て、仰々しい敬礼とともに、総統に申告した。

「ドイツ少女同盟 (Bund Deutscher Mädel) 空軍選抜部隊百名、ただいま到着いたしました」

「待ちかねていたぞ！」

総統が大声で答える。

「この国家存亡の秋に馳せ参じたうら若き女

性諸君。諸君に、我がドイツ帝国の防空の一翼をゆだねる。諸君は一丸となって、敵爆撃機の撃滅にあたってもらいたい」

熱く長い演説を常とする総統だが、わずか一コ飛行隊の結成式に來臨したこと自体が異例中の異例である。基地の規模に比例するように、訓示はごく短かった。そして、最後にいっそうの大声で締めくくった。

「我はここに、ドイツ少女戦闘飛行団（Deutscher Mädel Jagdgeschwader : DMJG）の発足を宣言する！」

百人の女性士官をはじめ、カメラマンを除く全員が直立不動の姿勢で右手を前へ突き出した。

「ハイル！」

「ジークハイル！」

「ハイル！」

「ハイル、マインフューラー！」

彼女たちの意気込みを示すように、黄色い声が男どもの鯨波を圧倒したのだった。

総統はあわただしく帰ってゆき、基地の営繕係は跡始末に追われる。記者団は、ドイツ空軍初の女性戦闘機パイロットに取材をしようと粘っていたが、ほどなく衛兵につまみ出されてしまった。

二十五人ずつは、そのままひとつずつの宿舎へはいった。これからは、この二十五人が

一コ中隊として寝食を共にし、共に戦うのだった。

アンナ・シュライバーは、ベッドと小机に占領されている小さな個室で、先に運び込まれていた大きな旅行鞆を開いて、それからベッドの下の小さなチェストを眺めて、溜息をついて鞆を閉じた。独り身の男にとってはじゅうぶんでも、若い娘の大荷物を収納できる容積はなかった。

ドアがノックされて。グレーテ・ビュッセルがはいってきた。アンナと同じ茶髪だが、彼女のほうが色が薄い。うなじが見えるまで短くしているアンナと違って、短いポニーテールに結っている。

「ここ、いい？」

アンナと並んでベッドに腰かけた。二人がならぶと、背丈は同じくらいだが、腰回りはアンナよりわずかに大きく、胸と尻はずっと大きい。

「個室って、いいわね。壁が薄いのが気にいらないけど」

三週間の訓練期間中は兵士に準じた扱いで大部屋だった。百人が任官したのは、まさしく今朝のこと。いきなり少尉というのは、下士官兵が八割を占めるの男どもにちょっかいを出させないための配慮だった。

「だけど、狭っ苦しくてしょうがないわ。集合まで時間もないし、外に出ましょう」

BDMグライダー部の頃からの付き合いだが、恋愛活動に積極的なグレーテが、アンナにはまぶしくもありすこし苦手でもあった。

宿舎を出たところで、ゾフィー・クリュゲとロジーナ・オルテンベルクの二人と合流した。

「みんな、シュヴァルムを組んでるわね」

娘たちの中では年長の（といっても二十一歳だが）ロジーナが、基地のあちこちに散らばっている同僚を指差した。

戦闘機は二機がペアを組んで、相互に支援する。これをロットといい、ロット同士が相互支援する編隊をシュヴァルムという。ちなみに、旧来の三機編隊はケットというが、ケット三組の九機をロット四組の八機が圧倒するというのが、今や空戦の常識となっている。

女性士官たちは、基地内でも外でも単独行動を慎むように、命令ではなく忠告されていた。理由は明らかだ。それが二人でもなく三人でもなく、自然と四人ずつにまとまっているのは、やはり訓練の成果だろう。三機がぴたりと密集編隊を組むには熟練が必要だが、なんとなく寄り添って二機ずつが飛ぶくらいは、グライダーで飛行の基礎を習得している彼女たちなら、三日もあれば可能になる。もちろん、一日に三時間も四時間も飛んで疲れ果てて初めて達成できることではあるが。

基地のいたるところに掩体壕が設けられて、

百機のHe 162A-10がうずくまっている。

「うわ、エンジンが二つだ。小さいけど」

「今度の機材のほうが、格好いいわね」

目の前のジェット戦闘機を眺めて、ゾフィーが言う。

それには三人ともが同意した。

そもそも、He 162は不格好なシロモノだった。なにしろ、背中にジェットエンジンを背負っている。しかも、補器類がエンジンナセルの上部に収納されているので大きく膨らんで、まるで芋虫を背負った小魚のような印象を受ける。これでザラマンダー（火竜）を名乗るのは、いささか面映ゆい。

エンジン配置は、訓練時代のHe 162A-2と同じだが、新型機は細長いエンジンが剥き出しで並列に配置され、しかも後半はあっそう細く絞り込まれているので、奇妙な形体ながらも精悍に見えた。

「あそこのは、メッサーシュミット？」

開かれた格納庫をグレーテが指差して、ロジーナが派手にずっこけた。肩に掛かった赤毛が宙に広がる。

「馬鹿。あれはフォッケウルフ。Fw 190 Dだよ。『長っ鼻のドーラ』って呼ばれてる」

「ふうん。太くて長いのね」

ほかの三人は、意味深なコメントを無視した。

「だけど、なんだってプロペラの戦闘機を置いてるんだろ」

ロジーナが今度は溜息をついたが、アンナはグレーテに与したい気持ちだった。FW 190がBf 109以上に活躍しているとは、アンナも知っている。でも、速度ではMe 262やHe 162の敵ではない。

「どんなにスピードが速くても、着陸前は絶好の鴨になっちゃうでしょ。加速性の悪いジェット機は、とくにね。上空援護が必要なもの」

「そのとおり。だから、俺たちは姫様の騎士(Prinzessin Ritter) ってわけさ」

不意に後ろから声を掛けられて、四人が驚いて振り返った。

三十絡みの男。すこしだけ着崩した飛行服の袖には少佐の階級章が縫いつけられている。

それを素早く見て取ったロジーナが直立不動で敬礼して、あわてて三人が倣った。

男は、だらしないと格好いいの中間みたいな敬礼を返した。

「かわいそうにな、とんでもないガラクタに乗せられて」

ロジーナが右手を下ろして、訝し気に尋ねた。

「ザラマンダーのことですか？」

「だいたい、ベニヤ板で作った機材だ。しかも、ターボジェットが足りなくて、パルスジェットに換装している」

そんな飛行機に乗るのは真っ平だと言わんばかりの口調だった。

「パルスジェットって、報復兵器1号のエンジンですね？」

国民の戦意高揚を狙って、V1の戦果は大々的に報道されてきた。スピットファイヤあたりで簡単に撃墜できるとは、ドイツ国民は知らない。

「着陸する必要のない爆弾だからな。だが、おまえたちは着陸して、また出撃しなけりやならん。いくら俺たちが掩護しているからといって、今みたいに背中をがら空きにしてたら、V1と同じになるぞ」

不得要領の四人を置き去りにして、基地防衛飛行隊のパイロットは他のシュヴァルムへ目標を転じた。

「男って、ほんとに粗野なんだから」

「そう？ 逞しくて素敵だよ」

ゾフィーとグレーテが真反対（でもない）な感想を口にした。

「とにかく、凄腕なのはたしかだと思うな。戦闘機乗りとしての話だけど」

アンナもロジーナほどではないが、軍隊や兵器にはBMDの中でも詳しいほうだ。

空軍、それも戦闘機乗りの階級は撃墜数が大きくものを言う。三十そこそこで少佐なら、おそらく歳の数以上に敵機を撃墜しているだろう。そういった男に背中を護ってもらえる

なら、とても心強い。

四人の話を断ち切って、集合ラッパが鳴り響いた。

三十分前には美しい檀がしつらえられていた広場へ、全員が向かう。

先ほどと同じ形で並んだ娘たちの前に少将の階級章を付けた基地司令官が立った。

「私が基地司令のオイゲン・シュタイナーだ。総統直々の訓示にもあったように、諸君が女性パイロットの道を切り拓いてくれば、我らがドイツの戦力は一挙に倍増する。全員が騎士鉄十字章を獲得するくらいの気迫で任務にあたってほしい」

総統の訓示が短かったからには、『下っ端』の彼が偉そうな演説をぶてるはずもなかった。

つぎに立ったのは、戦隊長のリヒャルト・ホフマン大佐だった。さきほどシュヴァルムの背後を衝いた少佐より幾らかは歳を食っているが、猛禽を擬人化するところなるのではないかとアンナが思ったほどにも、殺気にあふれている。

「貴様たちがうら若き女性だからといって、俺は見下しはしないし、ちやほやもしない。すべて、男性士官と同じに扱う。ただし、貴様たちは自分が女であることを常に意識している」

すでに何度も聞かされてきたお説教だった。ドイツ軍初の女性士官であれば、その一挙手

一投足が新聞に書き立てられラジオで喧伝される。基地の外では、とくにそうなる。一人前の軍人であるから、店で酒を飲むのはかまわない。しかし、酔っ払って醜態を晒すな。街の男とつきあうなら、醜聞になるまえに婚約してしまえ。独りで外出して男に襲われて、まかり間違っても組み伏せられでもしたら、ドイツ軍の恥になる。全ドイツ女性の崇高な任務の機会を奪うことにもなりかねない。

ホフマン大佐の訓示は、これまでのお説教よりはずっと具体性を帯びていた。

「基地防空隊にも限りがある。ロッテよりはケッテ、ケッテよりはシュヴァルムで行動しろ」

基地の兵隊に護衛させるのも問題があるという意味だ。士官が下士官兵と狎れ合うのはよろしくないし、若い娘が大の男を従僕のごとく扱うのも世人の眉をひそめさせる。士官のエスコートならかまわないが、対一ではやはり醜聞になりかねないし、若い女に囲まれていても手出しできないという環境に耐えられる男など、そうはいない。

聞いているうちに、アンナは腹が立ってきた。ここに来たのは物見遊山のためでも、まして酒を飲んで男と戯れるためでもない。非戦闘員、いや赤ん坊の上にまで爆弾を落とす敵の重爆撃機を撃墜するためだ。国民と国土とを護るためだ。

このときの彼女には、激戦の中にも、いや生命を賭した戦いであるからこそ、底抜けの息抜きも必要になるなどとは、考え及ばなかった。

「貴様たちに、若い兵の真似をしろとは言わん。酒保で買い込んだ安酒で酔いつぶれて、精力を持て余せばマスのひとつも搔いてから寝ろ——とはな。以上！」

虚を衝かれて、ぱらぱらと敬礼が湧いた。それが揃うのを待って答礼すると。

「この後、機種転換について総整備長から講習がある。そのまま待機せよ」

ホフマン大佐が退くと同時に。

「では、実地講習といこうか」

列の背後から声がかかった。シュタイナー司令官と同年代の、しかしいくらか貧相な体格の男がそこに立っていた。階級章は少佐。体格以上に司令官との落差は大きい、派手な戦功とは無縁な整備部隊の長とあっては致し方のないことだった。

総整備長は、掩体壕から引き出したジェット戦闘機の前に全員を立たせた。

「こいつが、お嬢ちゃんたちの乗る、He 162 A-10だ。ありていに言って、A-2の劣化バージョンだ。対地速度は、高度三千メートルで時速七百キロメートルに過ぎない」

A-2は高度六千で時速九百キロメートルだから、格段の差がある。

「ええっ？ マスタングより遅いよ」

百人もいれば、名前は知っていても言葉を交わしたことの無い相手もいる。アンナにとって、ブリギッタ・フィンケもそのひとりだった。生理周期が自分と一緒にだと知ったのも、今朝になって中隊が編成されたときのことだ。「馬鹿。マスタングは高度七千メートルで同じ速度なんだよ」

馬鹿が、ロジーナの口癖らしい。

「空気抵抗は高度が高ければ小さくなるから、七千メートルでは、ザラマンダーはマスタングより速い」

マスタングより速いか否か。言葉を換えれば、敵戦闘機の追撃を振り切ってB 1 7に肉薄攻撃を掛けられるか否か。彼女たちに与えられた任務を果たせるかどうかの瀬戸際だった。

「期待を裏切ってすまんが。こいつの高空性能はP 5 1 Dより悪い。あっちは、二段二速の過給機を持っているが、He 1 6 2は自然吸気だ」

「えええ？ でも……」

He 1 6 2 A-2もMe 2 6 2も、高空性能はレシプロ戦闘機をはるかに凌ぐ。空気を掻いて進むプロペラに頼らなくてすむからだが、高々度でも出力を維持できるのは、ターボジェットエンジンのファンが強制的に空気を吸い込むからだ。無段階変速の過給機を装

備しているに等しい。アメリカが技術独占しているターボチャージャーの親玉でもある。

しかし、パルスジェットは前方から自然に流入してくる空気に頼っている。

「ちょっと、パルスジェットの勉強をしておこうか」

総整備長は娘たちに、適当に腰を下ろすようにと命じた。グライダーの順番待ちをするあいだはずっと剥き出しの地肌に座っていたから、今さらコンクリートの滑走路に座り込むことに抵抗を感じる者はいなかった。男と同じ軍服だから、下着が見える心配もない。

「こいつは、おっそろしく単純な構造をしている」

エンジン頭部の膨らんでいる部分に燃料を吹き込んで、プラグで点火する。燃焼ガスは急速に膨張するが、前方の空気取入口はバネ鋼の弁でふさがれているから、ガスは後方にだけ噴出されて推力が生じる。燃焼室内の圧力は急激に下がって、ガスの慣性がはたらいで大気圧以下になる。すると、弁が押し広げられて前方から新しい空気が流入する。実際には、燃焼室と後方のダクトとの形状を適切に設計すれば、共鳴振動が起きて吸気量が増えるし、飛んでいるあいだは前進によっても空気が押し込まれる。

ただし、原理的に間欠燃焼であるから、吸気は弁が開いているあいだだけということに

なる。

さらに、航空機の動力としては致命的な欠陥があった。燃料を絞ると間欠爆発のサイクルが崩れて停止してしまう。じゅうぶんに速度が残っていれば再始動できるが、たとえば速度を殺して着陸体勢にはいったところを襲われると、どうにもならない。基地防空隊が必要なわけだ。

「もひとつ、不都合がある」

娘たちは意気消沈して、もはや溜息すら漏らさない。

「総員起立」

直接の指揮下にはなくても、少尉と少佐とのあいだには三段階の階級差がある。年齢も二倍は違う。全員が、ぱっと立ち上がった。

大きなボンベを積んだ小型トラックがやってきて、ボンベの先に突き出ている長い管をエンジンの吸気口に突っ込んだ。

「最先任は誰かね？」

「私です」

二十三歳のマルゴット・ラハナーが前に進み出た。四年もBMDの幹部を務めていただけに、十八歳までの一般団員とは違って娘というよりは女性だった。

「こいつに乗って、エンジンを掛けてみろ。手順はA-2よりも簡単だ。燃料コックを開いて、スロットルを始動マークまで進めて、『点火』の合図でボタンを押す。五秒以内に

始動しなかったら、ボタンから手をはなして、つぎの合図を待つ。それだけだ」

物怖じすることなく、マルゴットはコクピット横に立て掛けられた短い梯子上がって、操縦席に就いた。

シュヒュウウウウウ……

ボンベからエンジンに空気が吹き込まれて、着火性の良い始動燃料もわずかに混合される。

総整備長が右手を勢いよく振り下ろした。

「点火！」

ブオッ、ブオッ……ブオオオ！

凄まじい咆哮が基地全体をどよもした。エンジンの近くにいた娘たちは、両手で耳をふさぐ。

ターボジェットの爆音にはファンが高速回転する金属音が混じっているが、パルスジェットには、それがない。そして、ずっと激しい轟音だった。

大きな車止めにタイヤがめり込み、前脚は推力を受けて縮んでいる。そして、翼端が三十センチほども上下に震えている。姿勢を低くして今にも獲物に飛びかかろうとしている猛獣――に、似ていなくもないが。主翼の両端がダックスフントの耳さながらに大きく下へ垂れているのが、不似合いに滑稽だった。

総整備長が両手でX字を描いた。

爆音がぱたっと途絶えて、耳が痛くなるほどの静寂が訪れる。

マルゴットが、よたよたとコクピットから降りてきた。

「これで、まともに戦闘できるのですか？」

総整備長が嘆息する。

「戦車で使っている骨伝導イヤホンと喉頭マイクで、通信はできる。振動については……尻の下に敷くパラシュートがクッションになるし、飛び上がってしまえば、まあ、シリンダーの欠けたエンジンで飛ぶよりは、ずっと快適だがな」

まさか、使い物にならない機材を百機も送り込んでくることもなかろうさ——と、けっして明るくない顔で、自分に言い聞かせてでもいるかのような総整備長のハインツ・ヒルシュ少佐だった。

グライダー訓練を受けただけの市民でも即座に戦力に出来る、操縦容易で高性能の国民戦闘機（Volksjäger）。それが、He 162の開発目標だった。

意図に相違して試作機の操縦性は劣悪で、しかもアルミニウムの不足を補うべく木材を多用したはいいが未熟な接着技術のせいで、試作1号機は試験飛行中に空中分解した。

良質な接着剤が開発され、製作技術も向上したが、最後まで悩まされたのが横安定の悪さだった。エンジン排気を避けて配置された双垂直尾翼のせいか、背負ったエンジンの空

力的影響か、低速時の直進飛行——着陸時に著しく安定を欠いていた。

この問題を解決したのが、ロケット戦闘機 Me 163 を設計したアレクサンダー・リピッシュ博士だった。彼は三角翼機とか無尾翼機など、下手物としかいいようのない機体を計画どころか試作まで進めて、ドイツ空軍を変態飛行機の巣窟にした犯人のひとりではあったが。彼にしか理解できない独特の主翼理論に基づいて、両翼端を下へ折り曲げるという暴挙に出たところ、He 162 のじゃじゃ馬ぶりは、ぴたりと影をひそめた。

横安定を増すために付けられている上反角を相殺するような形状が、かえって横安定を向上させたのだから、偶然の思いつきでなければ天才の閃きである。

こうして機体は量産の目途がついたのだが、つぎつぎと資源地帯を奪回され、本国の工場が爆撃で破壊される中、いっそう深刻な問題が He 162 の前にたちふさがった。高温に長時間耐えられる合金鋼の絶対的な不足である。大本命の Me 262 に供給するエンジンさえ足りないのだから、戦力として未知数の He 162 にまわす余裕などない。

窮余の一策として計画されたのが、パルスジェットエンジンの採用だった。エンジンは全体が赤くなるほどの高温に達するが、ターボファンほどには高温でも高圧でもない。弁

機構は毎秒数十回の開閉を繰り返すが、それだけ空気に冷却されているわけだから、通常のパネ鋼で間に合う。

最後に問題になったのが、パイロットだった。グライダーの操縦経験のある若者といえば、ヒトラーユーゲントの団員だが、彼らはとっくに兵役に就いていた。となると、ヒトラーユーゲントの女性版であるドイツ少女同盟団の出番となる。彼女たちは、厳格な指導で集団生活の規律も身に着けているし、なによりも国家の方針を疑うことを知らない。

空軍は全国のBDMグライダー部員から希望者を募り、ほぼ全員が応じた八百人から二百人を選別して短期訓練を施した。訓練初期の事故で重傷者を含めて三十名が失われた。死者十五人のうちのほとんどは、パラシュート脱出の失敗による。この教訓を受けて、訓練には最低でも一回のパラシュート降下が採り入れられ、以後も事故は何度も起きているが、死者は二人にとどまった。

訓練の過程で不適格と判定された者、事故を間近に見て怖じ気づいた者が脱落して、最後まで残った者は百十人。そのうち十人は後進の指導に故郷へ戻されて、ここに第一期の女性戦闘機パイロット百名が誕生したのだった。

着任の翌日から、猛訓練が始まった。

すでに離着陸を含めて基本は身に着いている。四機小隊、あるいは十六機中隊での相互連携と、ドイツ空軍で唯一の(古色蒼然たる)四発爆撃機 F w 2 0 0 を仮想的とした攻撃訓練とが中心だった。

訓練は日曜日も続けられた。といっても、娘たちに休養が与えられなかったのではない。二十五人の中隊ごとに、四週間のうちまるまる一週間が休養日とされた。

最初に二十五人ずつが配置されたときから、生理周期が近い者同士が集められていたから、同じ兵舎で暮らすうちに、ほぼ完全に同調してくる。だから、稼働状態にあるのは常に四コ中隊のうちの三コということになる。十六期編成の中隊に対して二十五人なのは、当然に生じる人的損害に備えてのことだが、生理周期がずれた者の交代要員という意味もあった。

訓練期間中も、昼夜分かたぬ爆撃が続いていた。しかし、訓練不足で出撃しても、機材も生命も無駄に消尽するだけだ。

基地も二度爆撃されたが、広い範囲に分散され嚴重にカモフラージュされた H e 1 6 2 A - 1 0 は、十八機が破壊されたにとどまった。基地防空隊は空中退避を兼ねた邀撃で半数の四機が失われ、戦死者も出したが、ドイツ少女戦闘飛行団 (DMJG) の隊員は軽傷で病院送りになった者が三名だけで切り抜け

た。

そして、基地防空部隊は四月中に一コ中隊十六機に増強され、He 162A-10も六機が補充されて。

いよいよ初陣の朝が明けた。

性裁：Mai 1944

指示された空域を目指して中隊単位で上昇を続けながら、アンナはどうしても操縦に集中できないでいた。パルスジェットエンジンの振動が、彼女を煩わせている。

もしもここが寝室だったら、ひとりでくつろいでいるときだったら、あるいは振動がもたらす股間の疼きに身をゆだねて、快感の坂を緩やかに登っていくこともできたろう。

しかし、彼女は今、戦場へと赴いている。生命を賭して、敵重爆撃機を屠るのだ。すでに彼女の全身をアドレナリンが駆け巡り、意識は目前の戦いにのみ向けられている。性的快感など夾雑物でしかなかった。

「敵爆撃機群、発見」

戦隊長の声が、エンジンの轟音に妨げられることなく明瞭に聞こえた。頭蓋骨の振動を介して聴覚神経を刺激しているという知識が、声が頭の中に響いているという錯覚を生じさせる。

「敵高度五千。方位。ロゼ、十一時。リリエ、一時。プファイル、ゼロ時」

中隊には、それぞれ花の名前がつけられている。第四中隊第1小隊を縮めて言う「フィエルテン、アイン」となる。最初のフィエルテンを聞き漏らすと、第1中隊全体への指

示と勘違いしかねない。といって「フィエル
テンシュタッフエル、アインシュバルム」な
どと言っているのは、そのあいだに撃ち落とさ
れてしまう。しかし、「プファイル、アイン」
なら間違えようがない。

愛称に花を選んだのは、女性の部隊だから
という、いかにも男の考えそうなことだった。
しかし、彼女たちもこの名前を気に入ってい
る。第1中隊が薔薇（ロゼ）、第2中隊が百合
（リリエ）、第3中隊が菊（クリザン）で、今
日は生理休暇中。第四中隊は矢車草（プァ
イル）。胴体と主翼に巻かれた帯も花の色その
ままに、赤白黄青。

アンナはリリエ3の2番機だった。1番機
と2番機、3番機と4番機でロツテを組む。
だからアンナは第3小隊長の列機というこ
とになる。

アンナは言われた方角の上空に目を凝らし
たが、青い空と白い雲の他は、なにも見え
ない。ほぼ真横、同高度に浮かんでいる黒点
は第1中隊だ。

「敵の頭を押さえる。針路を維持して六千
まで上がれ」

スロットルレバーの最後の三センチを押し
込むと、さらにエンジンが吼えて、しかしく
ぐもった唸りが混じる。最適燃焼比を超えて
燃料を供給した結果だ。速度計の示度はあ
まり動かず、昇降計の針が右へじわりと動く。

タービンの回転が上がるのを待たずに即応することだけが、パルスジェットの特長だった。

さらに操縦桿を引くと、ザラマンダーは頭をぐいと上げて急上昇に移った。揚力とともに空気抵抗も増えて、速度は落ちる。

「DMJG司令部から戦隊へ。大型機群上空に小型機多数。増速して降下中」

レーダー探知の速報がはいる。

「戦隊、了解。ロゼ、針路二七。リリエ三三。プファイルそのまま。ロゼとリリエは、指示計器速度五百五十まで増速」

方位は北をゼロ度として、時計回りに十度刻みで表わす。敵機も刻々と（速度も高度も変えながら）動いているから、もっと細かく指示しても、針路を維持するのに神経を使うだけで、実効はない。

アンナは計器を見ながら操縦桿を押した。昇降計の示度がゼロに近づき、速度計の針が右へ振れていく。

もちろん、計器ばかりをにらんでいるわけではない。敵機が出現しないか、常に上下左右、さらには後ろまで見張っていなければならない。

戦隊長は、なにを考えているのだろう。アンナには、この編隊行動の意味が理解できなかった。現在の高度で速度計が五百五十を指せば（頑張って暗記した気圧の係数を掛けて）対地速度は六百五十前後だ。最高速度に近い。

つまり、上昇余力はごく小さい。邀撃してくる敵戦闘機の鼻先をすり抜けられるだろうが、それから上昇しては爆撃機を取り逃がしかねない。

その疑問に答えるように。

「プファイル、ただちに酸素マスクを装着。しっかり見張れ。敵の大半は、貴様たちに突っ掛ける。機影が見えたら、シュヴァルム単位で散開して急降下しろ。報告を忘れるんじゃないぞ」

敵に正対している第四中隊を囷に使う気なのだ。ただし、危険は少ない。P 5 1のほうが速くても、真反対へ逃げる目標に向き直って追いかけるのは困難だ。

「ロゼとリリエも油断するな。敵は二段三段で突っ込んでくるぞ」

その声が終わらないうちに。距離は判別できないが、かなりの速度で飛行機雲が右から左へと伸びていくのが見えた。

「敵発見！ リリエ前方上空」

操縦桿の送話ボタンを押して叫んだ。

「落ち着け。それは俺だ」

言われて、気づく。敵が、たった三機で接近してくるはずがない。三筋の飛行機雲は、本部小隊（Gruppenstab）だ。本部小隊だけが三機編隊なのは、戦隊長が指揮に専念できるよう、二機で護衛するためだ。

「了解。確認しました」

恥の上塗りといった気分だが、返答しないと他の者には、どちらの言葉が正しいかわからず、無用の混乱を招きかねない。

「プファイル。敵多数を視認。急降下で回避します！」

逃げ切れるとわかっている、声はうわずっている。

「了解。ロゼとリリエは毎分一千で上昇。針路はロゼ〇〇、リリエ二七。中隊単位で集まれ。遅い者に合わせろ」

He 162 A-10の最大上昇率はカタログ値で毎分一千二百メートルだから、『無理のない範囲』での急上昇を指示されたことになる。ちなみに、A-2は一千四百メートルだ。

操縦桿を引くと、背中が座席に押しつけられて、腰に伝わる振動が激しくなる。

「あう……」

場違いの快感に逆らって、長機との間隔を詰めながら、ほかのシュヴァルムを探す。

「DMJG司令部から戦隊へ。小型機は二群に分かれた」

「戦隊、了解。プファイル、反転して爆撃機に向かえ。針路は司令部に尋ねろ」

まるで神の目のように思える戦隊長でも、真反対の遠くまで逃げた中隊は見つけられないらしい。そうと知って、アンナは初めて、ホフマン戦隊長に親近感とは言い過ぎにしても、人間くささを感じたのだった。

「くうう……」

そんな心の動きと関係があるのか。腰の奥にひそむ蕾を振動に揺すぶられて、また甘く呻いてしまう。

「高度四千。上昇を続けろ。酸素マスクは着けているだろうな？」

アンナは、すっかり忘れていた。あわてて装着する。冷たい酸素が頭をしゃきっとさせて……感覚も鋭くさせる。

「くそう……」

アンナは、また呻いた。

「ドーリス、どこにいるの？」

リリエ1の長機、エミーリエの声。

アンナは上下左右を見回して、左前方同高度に三機を見つけた。あれがリリエ1だろう。右後方のやや低いところをかたまって飛んでいる四機も胴体に白帯を巻いている。リリエ2か4のどちらかだ。

「どこ？ みんな、どこにいるの？」

ドーリスのうろたえた声。無線通信だから、「声の聞こえた方角」がわかるはずもない。「ツァーベル。リリエ1は十時上方だ。リリエ1の3機、バンクしてやれ」

翼を左右に傾ければ、その動きは目につきやすい。

「見えた。合流します」

アンナは、念のためにシュヴァルム列機的位置を確認した。左前方に長機、左正横に3

番機、さらに左後方に4番機。多少のデコボコはあるが、基本どおりのシュヴァルム編隊になっている。

編隊の前方をゆっくりと横切っているのが、追いついたドーリス・ツァーベル、リリエ1の4番機だ。

リリエ1の数百メートル先を黒い影が横切って、アンナの妖しい感覚は消し飛んだ。が、背中にパイプを背負ったシルエットを見間違えはしなかった。戦隊長の指示で交叉経路を飛ぶロゼ中隊の——胴体の赤帯に描かれた11の数字は、第1小隊1番機を意味している。ロジーナ・オルテンベルクは年長というだけでなく技量も(団栗の背比べの中ではあるが)秀でているから、当然の番手だった。

「上空、敵機」

短く明瞭な、戦隊長の声。

「ロゼ、右へ回避。急げ！」

アンナに見えているロゼ中隊の八機が、機首を水平に戻しながら翼を大きく傾けて、右旋回にうつった。

その左横を赤い光の筋が走った。直線上昇飛行を続けていたら、ロジーナのシュヴァルムがそこにあっただろう空間だった。

火箭を追うように、無数の黒い影が左から右へ突き抜ける。

ロゼの全機が機首を下げた。降下を意図しての機動ではなかった。

飛行機の旋回では、方向舵は補助的な役割しか果たさない。機首を右へ振っても、飛行機は慣性で直進を続ける。じきに空気抵抗で右へ曲がり始めるが、その動きは緩慢である。右へ旋回するには、飛行機を右へ引っ張る力を作る必要がある。つまり、補助翼で主翼を傾け、揚力で右へ引っ張る。それだけでは、機首を元の方角に向けたまま右へ滑って行くので、機首も右へ向ける。付け加えるなら、揚力方向が傾けば垂直分力が減るので、高度を維持するには操縦桿を引いて揚力を増やさねばならない。

以上が旋回の基本なのだが。機体の傾きを大きくしていくと、方向舵と昇降舵の役割が入れ替わる。つまり。右旋回しているとき、地上は右横に見えている。そこで右に舵を切れれば、地上に機首を向けることになる。急旋回を続けるには、上げ舵をいっぱい切り、方向舵は左へ踏み替えなければならない。

爆撃機に対する急降下攻撃とズーム上昇に絞って訓練を急いできたDMJGの隊員は、宙返りや横転は元より、垂直旋回も（控えめに言っても）得意ではなかった。

さすがに、地上が前方に見える前に、ロゼ隊は機首を引き起こした。

いや。ただ一機、そのまま急降下に移った者がいた。旋回中に機軸を合わせて、真後ろから敵戦闘機を追尾する位置に就いている。

「やめろ、オルテンベルク。引き起こせ！」

戦隊長の声が、びいんと頭に響いた。

「敵は目の前です！」

ロジーナはさらに追う。

敵機が急激に引き起こして、その僚機がロジーナの目前を斜めに横切った。本能的に行動すれば、距離が近いほうを追ってしまう。ロジーナは左に切り返して、そのあいだに引き離されてしまった。

敵はサッチ・ウィーブなどと御大層な名前をつけているが、つまりはロッテにおける基本的な相互支援だった。ロジーナはそれに、まんまとはまってしまったのだ。

しかし、ザラマンダーのほうが、かなり速い。みるみる距離が詰まって。ザラマンダーの機首から火箭が敵機に向かって伸びた。

だが火箭は、弾丸が放たれた瞬間に敵機のいた空間に虚しく吸い込まれていく。敵機は、弾丸が届くコンマ数秒のあいだに、何十メートルも先に逃げているのだ。

ロジーナは射撃を続けながら、敵機に向かって機首を振った。しかし過速がわざわざいして、火箭は敵機のはるか前方を走り抜ける。

と、そこまでは斜め後方に見えていたアンナだったが。

「ロゼ、水平飛行に復して右旋回。リリエ同じく右旋回。針路一二〇。プファイルは五百上がってから針路一五〇」

最後の指示に引きずられて上昇を続け、すぐに気づいて水平飛行で右旋回にうつった。

「くそう……」

アンナは歯がみした。腰の疼きに気を取られて、編隊を崩してしまった。

「うわっ……！？」

目の前に黒い影が迫って、アンナは操縦桿を左前へ突いた。空中衝突寸前ですれ違う瞬間に、胴体の白帯と14の文字が見えた。ドーリス機だった。シュヴァルムに合流しようとして、そのまま右へ行き過ぎて切り返してきたのだろう。

「リリエ1、左三百六十度旋回。2、3、4。右緩旋回で降下。一撃を掛けてから右旋回急降下で離脱。まだだぞ。ロゼ全機、リリエ離脱後に敵の右後方から突っ込め。左急旋回で離脱だ。全機、試射しておけ」

十秒間に及ぶ長い命令。

アンナは安全装置を解除して、操縦桿頭部の発射ボタンを一瞬だけ押した。

ドンドンドン……パルスジェットエンジンの轟音に、二十ミリ機関銃の重厚な発射音が重なる。機首下部の左右から、火の玉がひとつずつ飛び出して緩やかな弧を描き、虚空に消えた。実際には曳光弾の前後に三発の徹甲炸薬弾と一発の焼夷弾が装填されているが、それは目に見えない。

「リリエ、突っ込め！」

「リリエ、攻撃開始！」

戦隊長のどっしりした声と、エミーリエのうわずった声とが交錯する。

B 1 7の編隊は右下方に密集して同航している。

アンナは操縦桿を左へ倒して主翼を水平に戻しながら、じわあっと突いた。身体が浮き上がって、B 1 7が目の前にせり上がってくる。操縦桿を戻すと重力が戻って。

「あ……」

忘れかけていた快感が甦って、操縦桿を握る手が緩んだ。さらにGが掛かって股間を振動が駆け抜ける。

目の前に赤い筋が迫っては、左右に分かれていく。

(花火……?)

それを美しいと感じて。敵の砲火だと気づくまでに一秒ほどを要した。そのあいだに、彼我の距離は百メートルほども縮まっている。

眼前いっぱい、オリーブドラブが広がっていた。B 1 7の塗色だ。

(ぶつかる！)

アンナはフットバーを蹴って操縦桿を右手前に引いた。オリーブドラブが左に傾きながら眼の下をすり抜ける。

ガンガンと下から突き上げられた。被弾した。しかし、機はまだ飛んでいる。負傷もしていない。すれ違いざまにB 1 7の防御砲火

が数発命中したのだろう。座席の下に当たらなかつたのは幸運だった。

ほっとした瞬間。背中を思い切り殴られた。

バガッ……ベキベキッと破壊音がアンナを包む。左の至近距離を黒い影が駆け抜けた。今度は、掩護戦闘機に存分に叩かれたのだ。
(やられたっ……!?)

地上がくるくる回りながら上下に揺れる。アンナは墜落している。姿勢を立て直そうとしたが、操縦桿の手応えがなかつた。

「リリエ32被弾、脱出する！」

パニック寸前でも、さすがに報告は忘れなかつた。

アンナはキャノピーを開けようとして——ロック解除にもたついた。開けた瞬間に、風圧でキャノピーが吹き飛んだ。ベルトをはずすと、身体が浮き上がる。コクピットの縁に足を掛けて、思い切り蹴った。身体が空中に投げ出される。

アンナは尻に手をまわしてパラシュートの開傘コードを探った。見つけるまでに数秒。両手でぐいと左右に引く。あとは、ちゃんとパラシュートが開いてくれることを神に祈るだけ。

空挺隊員は胸に予備傘を装備しているが、操縦の妨げになるから、パイロットは尻の高さに吊ったパラシュートひとつが命綱だ。

ガクンと背中を強く引っ張られた。くるく

る回っていた天と地が、あるべき位置に落ち着いた。五十メートルほど下を乗機が落ちていく。左の主翼が消し飛び、エンジンも折れ曲がっている。背中の防弾板は十三ミリ機銃の弾丸を食い止めるように設計されているが、エンジンが無ければ斜め上から頭を射ち抜かれていたかもしれない。

降下訓練のおかげで、脚をくじくこともなく、アンナは地上に降り立った。畑の中だったので、近くで農作業をしていた者たちが駆け付けてくれた。中年の夫婦と若い娘。さらに五、六人がこちらへ向かっている。その中にも若い男の姿はなかった。

「えええっ……娘っ子じゃないか？」

「ドイツ少女戦闘飛行団の人だね？」

「はい。敵を墜とすはずが、逆に墜とされてしまいました」

「なあに。生きてさえいれば、またのチャンスもあるさね」

「でも、すごいな。あんなちっちゃな戦闘機で、あんな大きな爆撃機に向かっていくなんて。恐くないの？」

「爆弾を落とされたって死ぬんだから、戦って殺されるほうが納得できるのよ」

無辜の市民を護るためにとか、国家のためにとか——正義の戦いに立ち上がった娘として言うべき言葉を忘れて、アンナは半分の本音を吐露した。もう半分は……怖いけれど、

死ぬとはどういうことか、理解できていない。生命にあふれた十八歳の娘なら、それも当然だろう。

「すみませんが、電話を貸してください。基地に報告しなければなりませんので」

「おお、もちろん。ともかく家へおいでなさい。たいしたもてなしもできんが、お茶とクッキーくらいはあります」

「はい。ありがとうございます」

こうして、アンナ・シュライバーの初陣は惨めな結果に終わったのだが。

修羅場は、まだ終わっていなかった。いや、これから始まるのだった。

電話をすると、すでに迎いの機がこちらへ向かっているとのことだった。基地には連絡用のF i 1 5 6 シュトルヒがある。それをわざわざ差し向けてくれるとは、それだけ期待されているということだろうか。

一時間もしないうちに、華奢な高翼機がふんわりと道路に着陸した。

「お世話になりました」

農家の家族に挨拶をしてアンナが乗り込むと、シュトルヒはH e 1 6 2 の十分の一にも満たない滑走距離でふんわりと離陸した。

「あなたが被撃墜第一号です。これで悪運を使い果たしましたかね」

慰めているのか、からかっているのか、操

縦している軍曹が親し気に話しかけてきた。階級差を年齢で埋め合わせているような話しぶりだった。

「迎えにきていただいて、恐縮です。それで——部隊の戦果を御存知でしょうか」

「俺が飛び立ったときは、まだ部隊は飛んでたから、詳しくはわからないが——B 1 7を二機不確実というのは、通信班から聞いたけどな」

軍曹が不確実と断わったのは。ドイツ空軍では、ガンカメラの写真か複数の目撃証言があって初めて、公式に撃墜と認定されるからだった。炎上しながら墜ちていっても、消火に成功して生き延びているかもしれない。

それにしても。四十八機（と、本部小隊の三機）が邀撃して、たった二機。

「ああ、墜とされたのはあなただけですよ」

無神経に傷口を広げてくれる。全員が生還したのだから素直に喜ぶべきだとアンナは思うのだが、この話はしたくなかった。

「単独飛行で、危なくはないんですか？」

話題を探して、そこに行きついた。

戦闘機は巡航速度で蛇行しながら速度の遅い爆撃機と行動を共にするが、足の短いP 4 7は受け持ち空域を分担していて、空域外では直線飛行をする。たっぷり弾薬を残しての帰路で、単機で飛んでいる脆弱な飛行機を見つければ、ついでに食っておこうと考えるの

が当然だろう。

軍曹は、わざとらしく溜め息をついた。

「敵戦闘機の失速速度は百五十キロメートルよりも大きい。ところが、こいつの最大速度は百七十五キロメートルだ。五十キロメートルでも飛べる。この意味がわかるかね？」

具体的な数字を言われれば、アンナにもピンとくる。He 162でB 17を後方から攻撃するときの速度差は二百キロメートル以上。射撃のチャンスは一瞬だ。しかし、急降下で離脱したその先にも空がある。

「失速寸前で低空飛行するのは自殺行為ですね」

「そういうこと。もっとも、こいつに乗るのはお偉いさんが多いから、その自殺行為に挑む阿呆もいることはいる。おかげで、俺のスコアは三機だ」

つまり、それだけの敵機が地面にぶつかったということだ。

「だから、俺は鉄十字章を持ってるんだぜ」

敵機を撃墜した者に与えられる勲章としては大げさだが、名誉の証しである。これが五機十機百機と増えるにつれてランクが上がっていく。最高位は『柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字章』で、これは勲章以上の価値がある。受章の基準は戦闘機なら百五十機以上、四発爆撃機なら五十機以上。DMJGの隊員たちにとっては、アルプスよりも遥かな高み

だった。

巧みに敵戦闘機をかわして自滅に追い込んだ様を軍曹が得々と語るうちに、機は基地に帰投した。

戦隊は、まだ帰っていない。いや、いったん帰投して小休止の後、第二波の邀撃に向かったのだった。

F i 1 5 6 から降り立ったアンナを非番の隊員たちが出迎えた。

「お帰り。無事でよかったね」

「射たれたとき、恐かった？」

「今夜は生還パーティーだよ」

「うん……ありがとう」

雀の群のような仲間たちに、アンナは口数少なく答えて、宿舎へ引き揚げた。

時間が経って落ち着いてきたとはいえ、まだ興奮を引きずっていた。背後から射たれても、頭まで防弾板で守られているから、二十ミリの炸裂弾でもなければ貫通されない。それでも、エンジンが爆発すれば無事では済まないのだが。しかし、爆撃機の防御砲火は正面からくる。突っ込んで行ったときに当たる当たらないは、幾分かは攻撃のタイミングと角度で左右されるが、半分は運だ。

今日は運が良かった。アンナは、そこで考えを打ち切った。自分の死についてあれこれ考えたくはなかった。

じきに、第二波が帰投してきた。エンジン

を止めてフラップを出して。漫然と滑空するのではなく、左右に横滑りさせて急速に高度を下げてくる。ここらあたりは、滑空比が戦闘機の何倍もあるグライダーに乗っていた娘たちにはお手の物だ。

アンナは宿舎を出て、非番の娘たちとともに戦友を出迎えた。中隊ごとにロッテ単位で着陸して、最後に本部小隊の三機。

「搭乗員、集合」

アンナもリリエ中隊のすぐ横に立った。

「シュライバー少尉、報告せよ」

戦隊長の名指しで、一步前に歩み出る。

「アンナ・シュライバー。第一回目の邀撃に参加して、撃墜されました。敵爆撃機に左上方から接敵……」

「詳細は不要。全部見ていた。そして、貴様の経験は隊員たちの参考にならん」

戦隊長の言葉の意味はわからなかったが、アンナは口を閉じて敬礼し、隊列に戻った。

「シュライバー少尉、列外。一六〇〇に司令官執務室に出頭せよ」

列外とは、先に帰れという意味である。これを言われるのは、ふたつの場合がある。全体に雷を落とす前に、目覚ましい働きをした者はずしてやる。逆に、即刻の謹慎処分に付す場合。アンナが後者であることは、誰の目にも明らかだった。

指定された時刻の十分前に、アンナは部屋を出た。ドーリス・ツァーベルが同じように部屋から出てきた。

「わたしも呼ばれてるんだ」

ドーリスが浮かない顔で白状した。基地の最高責任者に呼びつけられるなんて、激賞される覚えがないからには、特大のお目玉に決まっている。

宿舎をでたところで、さらにロジーナ・オルテンベルクと出会った。

アンナは戸惑った。彼女は敵戦闘機を撃墜したと聞いている。司令官は激賞と譴責を同じ場で行なうつもりなのだろうか。

最年長のロジーナが、司令官執務室のドアをノックする。

「ロジーナ・オルテンベルク以下三名。戦隊長の命令により出頭いたしました」

「はいれ」

司令官執務室は賓客を迎えるときに備えて、広く、バラック建築には似つかわしくなく調度類も豪華だった。その絵画や彫像を後ろに控えて、三人の高官が待ち受けていた。

基地司令官と戦隊長、そして総整備長。優しい小父さんといった印象の総整備長も、おそろしく硬い無表情で、三人の娘たちに向かい合っている。

戦隊長が口を開いた。

「シュライバー少尉、前へ。貴様は、なぜこ

ここに呼ばれたか、わかっているか？」

アンナが一步前に進んで、直立不動で答えた。

「撃墜されたからです」

「戦闘機乗りにとって被撃墜は、職業病のようなものだ。まあ、撃墜までされなければ、ここへは呼ばなかったがな」

アンナは黙して立っている。

「貴様は絶好の射点に占位しながら、射撃することなく避退行動に移った。なぜだ？」

まさか、花火に見とれていたとは言えない。まして、振動で股間を刺激されて注意が散漫になっていたなど、女としても軍人としても、たとえ拷問されても白状できることではなかった。

「撃墜されたショックが大きくてはっきりとは覚えていませんが、距離判断を誤ったのだと思います」

「ふん。貴様の行動はなにもかも誤りだらけだった。避退後の直線降下も誤りだ。ひねれ機軸を振れと教えたのを忘れたのか」

まっすぐに（横滑りもせず）機首の向く方角へ飛んでいけば、未来位置を容易に推測されてしまう。空戦で生き残るには、速度を保ってデタラメな飛び方をしなければならない。

「貴様が生還したのは、まったくの僥倖だ。本来なら戦死していた。つぎ、ツァーベル少尉」

アンナが下がって、ドーリスが前へ出た。
「最初から最後まで、ふらふらと飛んでいたな。いったい、どういうつもりだ」

ドーリスは答えない。答えられない。

「貴様を編隊に戻すために、リリエ1は攻撃が遅れた。貴様のミスではなく怠慢によってだ」

そこで、戦隊長はほかの二人にも目を向けた。

「ツァーベルの合流を待たずに、ロッテ二機で攻撃行動を続ければよかったのではないかと思っている者もいるだろうから、初歩の算術を教えてやる」

He 162の武装は二十ミリ機関銃が二丁。各銃の発射速度は毎分七百五十発だから、四機八丁では、一秒間に百発の弾が敵機に集中する。

B 17の防御砲火は十三（正確には十二・七）ミリ機銃で、これは毎分六百発。斜め後方に対しては尾部銃座の二連装と上部の二連装とで計四丁だが、コンバットボックス編隊による相互支援があるから、大雑把に見積もって十丁とすれば、全部で一秒間に百発。

四機が同時に攻撃をかければ、敵の弾は二十五発ずつに分散される。単純計算では百対二十五で攻撃側が有利。弾丸の威力は口径の三乗に比例する（しかも、二十ミリは炸薬弾だ）し、前方固定銃と旋回銃とでは命中率が

格段に違うから、攻撃側が圧倒的に有利だ。

ところが二機だけで攻撃すると、こちらが発射する弾丸は五十発。自分を狙って飛んでくる弾丸も五十発。四機するときより四倍も不利になる。いわゆる『ランチェスターの二乗則』だ。

「貴様が編隊に復せず単機で攻撃をかけていれば、百対二十五の火力差で撃墜されていたところだ」

最後にロジーナ・オルテンベルクが弾効される。

「貴様は、なぜここに呼ばれたかわかっているか？」

「命令に背いて敵戦闘機を追いかけたからです」

「違う！」

間髪を入れぬ叱責。

「それだけなら、帰投時の講評で叱り飛ばして、おしまいにしてやる。しかし貴様は、仮にも中隊長だったのだぞ。十五機を置き去りにしたのだ。それ以上に不心得なのは……」

戦隊長が、ふっと息を吐いた。

「まず、聞いておく。なぜ、敵を追ったのだ？」

「あいつは、私を殺そうとしました。仕返しして当然です」

戦隊長が小さく笑った。好意的な笑いだった。

「戦争は個人の果たし合いではないが……そ

ういう向こうっ気の強さは、戦闘機乗りには不可欠だ。それはそれとして、だ。貴様が落とした機種はなんだった？」

「P 5 1です」

「貴様は、ワインボトルとビヤ樽の見分けもつかんのかっ！」

一転して、これまででいちばん大きな雷が落ちた。

「あれはP 4 7だ。帰りの燃料を心配して全機が増槽を付けたままだったから、なんとか追いつけたのだ」

ジェット機とは名ばかりのポンコツに、格闘戦もおぼつかない娘っ子が乗っていると侮られていたのだろう。最新鋭のレシプロ戦闘機と同レベルの性能ではあるのだからポンコツは言い過ぎとしても、パイロットが初心者ばかりというのは事実だ。

初心者にとっては、機種を見分けるどころか敵味方の識別すら容易ではない。「なんだかわからないが、黒いやつを追い回して、滅茶苦茶に射っているうちに当たってしまった」というのがふつうである。

「追いついたはいいが、あの射撃ぶりは何事だ」

戦隊長の声はいくらか柔らかくなったが、それがかえって叱責の凄味を増している。

「射ちっぱなしで追いかけて。撃墜したときには残弾ゼロではないか」

小口径の七・七ミリや十三ミリなら一分以上も射ち続けられる(実際には銃身が焼ける)が、二十ミリとなるとその三分の一くらいになる。ロジーナも腰だめで射ちっぱなしにしていたのではないが、一回に三秒も五秒も射ち続けたのは事実だった。

「ロゼ1と2を掩護に向かわせたから、貴様は生還できたのだ。弾切れでふらふら飛んでいれば、確実に食われていたぞ」

ドーリスは一コ小隊の足を引っ張ったが、ロジーナは二コ小隊、あるいは一コ中隊すべての作戦行動を妨げたことになる。

戦隊長はロジーナを列に下げて、三人をにらみつけた。

「貴様らは、今日戦死した！ それも、不名誉きわまる死に方だ」

そう決めつけられても仕方がないと、アンナは思った。ほかの二人はともかく、自分は実際に撃墜されたのだから。

「三人とも衣服を脱げ」

その命令に、性的な連想は働かなかった。貴様らに軍服を着る資格はない。そう言われたのだと受け取った。このまま除隊させられるのかもしれない。失意にまみれながら、アンナは上衣を脱いだ。ロジーナとドーリスも、しぶしぶ倣う。

「上品に言ってもわからんらしいな。俺は、素っ裸になれと命令したのだ」

アンナは耳を疑った。兵士のあいだでは新兵を様々に虐める悪弊があると、噂に聞いたこともある。

けれど、アンナたちはうら若き娘なのだ。そして命令を下した人物は粗野な古参兵などではなく、下士官兵の範たる高級将校だった。「そんな非常識な命令には従えません」

最初にロジーナが拒絶した。アンナとドリスは機先を制されただけで、思いは同じだった。

「命令に服従できん部下に用は無い。さっさと荷物をまとめて故郷へ帰れ」

戦隊長も命令の非常識さはわきまえているらしい。抗命罪に言及しなかったのが、その証左だ。

しかし、この場には基地司令官まで立ち会っている。命令に従わなければ、ほんとうに追い出されるだろう。

どこも負傷せずに早々と家へ帰されるなんて、男の目に素裸を晒す以上の屈辱だった。それでも、女として従える命令ではなかったのだが。

抗議をしたロジーナが、真っ先に動いた。ボタンを引き千切りそうな勢いで上衣もブラウスも脱ぎ捨て、ブラジャーまで筆り取った。性長の余地を残しているアンナとは対照的な、たわわな乳房が剥き出しになった。

顔を羞恥に染めながらも、さらにロジーナ

はズボンも脚から抜いて。さすがに、そこでためらったが。大きく息を吸い込むと、ズロースも一気に引き下ろした。髪と同じ色の赤い淫毛が、男たちの目に晒された。

「気を一付けっ！」

羞恥の源を隠そうとした手がおずおずと下がって。ロジーナは表情を消して直立不動の姿勢をとった。

じろりと、残る二人を戦隊長がにらむ。

アンナも決断して、ブラウスに手をかけた。ロジーナの何倍も時間をかけて、一切の衣服を脱ぎ捨てていく。

それを見て、ついにドーリスも決心した。泣きそうな表情で——いや、ブラジャーを取ったときには、丸っこい頬を涙が伝い落ちていた。

「これから、貴様たちに活を挿れてやる」

戦隊長がズボンを脱ぎ始めた。彼だけではなかった。司令官も総整備長もズボンを脱いで、さらにパンツまで引き下げた。三人とも、すでに股間に活がはいっている。

三人の娘たちが恐怖に目を見開く。顔をそむけたいところだが、『気を付け』の号令はまだ生きていた。

「心配するな。俺は、女だからといって特別扱いはしない」

目の前に高射砲のような逸物を突きつけられて、その言葉は信じられなかったのだが。

「回れー右っ」

わけがわからないまま、号令に従う。ここまで恥辱を受け容れて、今さら逆らっても遅いと、アンナは諦めている。それはロジーナも同じだろう。ドーリスだけは、全身を震わせている。

もしかすると彼女は処女なのではないかと、アンナは思い至った。彼女自身は、二年前に半年ほど交際した青年に処女を奉げている。性の悦びを開発される前に別れてしまったけれど。

「二歩、前へ」

壁が目の前に迫った。

「脚を開いて、壁に手を突け」

後ろから犯される——としか思えない状況になった。

誰かが、アンナの真後ろに近づく。

「貴様には、俺が活を挿れてやる」

戦隊長の声とともに、弾力のある熱く硬い『物』が、尻の割れ目を押し広げた。

「やめてくださいっ！」

アンナは横へ逃げようとしたが、がっちり腰をつかまれているので動けない。

「上官の立場を利用して女を犯すなんて……むぶうう」

口までふさがれて、いよいよ進退窮まった。

「うおうっ……」

ロジーナがぐるりと振り返って。同時に司

令官が股間をおさえて床に膝を突くのが見えた。ロジーナは物理的な反撃に成功したのだろう。

「おとなしくしている！」

戦隊長が恫喝する。

「活を挿れたら、それで一切を忘れてやる。それとも、素っ裸で重営倉にぶち込まれたいか」

いっそ、そのほうが操を穢されないで済む。とっさに考えたアンナだったが、実行する蛮勇はなかった。素裸に手錠を掛けられて営倉まで引きずられていく自分の姿が、ぱあっと眼前に広がった。もちろん、背景には基地中の男たちが群れ集まっている。

「ううう……ひどい……」

ドーリスは抗議する気力すら奪われて、泣きじゃくるばかり。

「ちっと痛いだろうが、お嬢ちゃんの純潔を奪ったりはせんから、安心しなさい」

総整備長の言葉は優しいが、すでに肉棒は尻の谷間に埋まっている。

「痛いっ……いやだああ！」

ドーリスが絶叫した。

なにが『純潔は奪わない』だ。憤慨して、しかし半ばは諦めていたアンナだったが。

「もぐぶっ……！？」

予想もしていなかった部分に熱い衝撃を感じて、痛みよりも驚愕のほうが強かった。

「そこ、違う！」

ロジーナも同じ部分を犯されたのだろう。立ち直った司令官に肉体を貫かれて、抵抗すら忘れて戸惑っている。

「違いはせん。男女ともに備えている器官に活を挿れてやっているだけだ」

戦隊長がうそぶく。

「でも、こんなこと……犯すよりもひどい！」

口をおおっていた手から逃れて、アンナが震える声で相手を詰った。

彼女自身は、生殖を目的としない性交をみずから望んで（すくなくとも、熱心に口説かれると喜んで）してのけるくらいには神をも恐れぬ不道德な娘だが、生殖器官以外を使っの性交に本能的な嫌悪を感じるくらいには、きちんと躡けられている。

「戦死者が生意気な口を利くんじゃない」

「く、くそう……この屈辱、死んでも忘れるものか」

ロジーナが気丈に言い返す。

「その気骨だ。悔しければ、戦果で見返してみろ。騎士鉄十字章を勝ち取ってみろ。そのときは、どんな仕返しをされても、文句は言わんぞ」

ぐっ、ぐぐう、ぐうっと――激痛を伴う熱感が、肛門を往復し始めた。

「あっ、あっ、あああっ……」

内臓を突き上げられて、自然と肺から空気

がこぼれる。

無茶苦茶だ——悔し涙をこぼしながら、アンナは戦隊長を呪詛した。騎士鉄十字章だなんて——トップエースの証しだ。B 1 7を十機墜としても届かない。シュバルム編隊の共同撃墜なら戦果は四分の一ずつになるから、受章までには五十機以上だ。

しかし。戦隊長を恨んでも、殺意までは起きなかった。歩兵が隊長を背中から射つよりは難しいだろうが、不意を衝けばB 1 7を墜とすよりは簡単だと思うのだが。

ぱんぱんぱんぱん……尻に腹肉を打ちつける三重和音が、執務室に響いて。

「下着をつける前に、ケツをよく拭いておけよ」

娘たちは、あっさりと解放された。

ロジーナは三人の男たちをにらみつけながら、ドーリスは嗚咽を漏らしながら、そしてアンナはうつむいて内心に怒りをたぎらせながら——身の始末をしたのだった。

「最初は驚いたけど……みんなの前で叱られるよりはつらくなかったかな」

それまでの涙と嗚咽は演技だったのかとアンナが疑ったほどに、ドーリスがけろりと言ったのけた。

「初めてのときも、あれくらいの痛みで済むなら楽かな。もちろん、あの三人の誰とも願ひ下げだけどね」

「馬鹿！」

通りかかった中尉が振り返ったほどの激しい口調で、ロジーナが言った。

「あんなことをされて、悔しくないのか」

「だって……悪いのは、あたしなんだから。そりゃ、ロジは敵を撃墜したのに叱られたんだから悔しいのはわかるけど」

ドーリスは、アンナについてはなにも言わなかったが。

アンナ自身は。実際に撃墜されたのは自分だけなのだから、同じ罰ではかえって不公平だと思わないでもなかった。